

九 わが胸の炎

富松良夫

朝雲の 晴るる高千穂 ひかり射し街ぞ誕れゆく

ああ 都城 わがふるさと

見よや人の心すなほに 美しく桜花ひらき

歴史古り なつかしきわが市

いざわれら われら 都城をともに愛せむ

この詩は、富松良夫が作った都城市歌の一節です。

富松良夫は、明治三十六年（一九〇三年）、都城市姫城町で元氣なうぶ声をあげましたが、小学校入学の年、せき髄カリエスの病気をわずらい、歩くことができないう体になってしまいました。そのうえ、良夫に対して手厚い看病を行い、心の支えとなっていた優しい母親も翌年、病気のために亡くなってしまったのです。父親は、仕事のために子供たちの面倒を十分にみるのができませんでした。このままでは良夫は楽しみにしていた小学校へ行くことができません。

そんなある日、良夫の悲しみを知ったおばが家にやって来てこう言いました。「良夫、明日から私があなたを背負って学校へ連れて行くからあなたも頑張るのよ。」

こうして学校へ通うことができるようになったのですが、病弱だった良夫は、なかなか友達と交わることができ

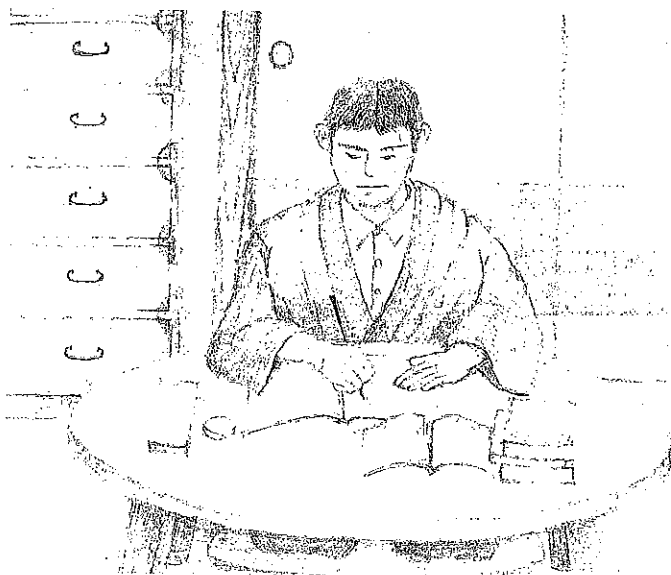


ませんでした。学校では、いつも外で元気に遊び回る友達を教室の隅からじつと見つめて過ごす日々が続きました。一人ぼっちの良夫は、友達のいない寂しさをうめるかのようにたくさんの本を読むようになり、見たことや感じたことを日記や絵にする毎を送るようになりました。

そんなある日、学校の先生が、「良夫君、君の絵や作文はとてもいいよ。これからもしつかり頑張りなさい。」と言葉をかけてくれました。他の生徒たちと同じような生活ができず、自信をなくしかけていた良夫は、この言葉にとてもはげまされ、この時から文章を書くことこそ自分の将来の仕事だと、強く心に誓ったのでした。そして、以前にも増してずっとたくさん詩や短歌、小説を読むようになりました。

「上の学校に進みたい。もっと深く文学の勉強をしてみたい。」と強く望んでいた良夫でしたが、これ以上おばに頼ることもできずに、学校は高等小学校まででやめざるを得ませんでした。しかし、良夫の文学に対する情熱はとどまるところを知らず、日本文学ばかりでなく外国の作品にも興味を持つようになってきたのでした。「外国の文学も深く勉強してみたい。」と外国文学への思いはつるばかりでした。

そんなある日、良夫は、都城にフランス人が住んでいることを知り、「僕にフランス語を教えてください。外国の本をたくさん読んでみたいのです。」と、熱心に頼みました。この熱意にうたれ、このフランス人は良夫に丁寧にフランス語を教えてくださいました。そのうえ、フランスの文学書をたくさん

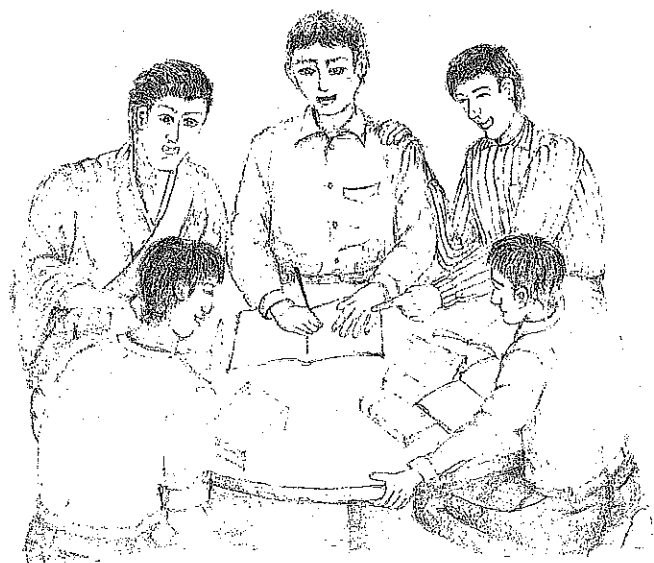


ん貸してくれたのです。こうして、良夫は、フランス文学にも接し、その後は、翻訳などをしながら勉強を続けていったのでした。

良夫が二十才(大正十一年)のとき、初めて念願の同人誌『盆地』に作品を掲載することができたのです。良夫の作品は、当時の宮崎県の文学界から、非常に水準が高いユニークな作品であると、大きな評価を受けました。そして、これを機会に、この作品に感動を受けた多くの人々が良夫をしたって家に集まるようになりました。そこでは、文学や音楽、絵画について、時間を忘れて語り合ったのでした。孤独な青年期を送っていた良夫にとって、この仲間達との語らいは、人生において最も充実した日々でした。

しかし、昭和二年、良夫二十五才のとき、思ってもみなかった悲しい出来事がおこりました。三才年下で良夫が最も愛していた妹、富士子の突然の死でした。富士子は、兄思いの優しい女性で、良夫の世話をしたり相談役になったりと、良夫にとってかけがえのない存在だったのです。妹、富士子の死が良夫にとってどれほどの悲しみであったかは、『盆地』への作品掲載が昭和三年二十一号で途絶えたことからもうかがいしることができます。

しかし、このような悲しみをのり越え、良夫はさらに勉強を重ねていき、詩集「かす微かなる花譜」や、妹、富士子にささげる詩集「さび寂しき候鳥」を出版し



ました。これらの詩集を通して良夫の名前はさらに広く世間に知られるようになっていったのです。終戦後は、都城を中心に、文化講座やフランス語講座などの講師を意欲的に引き受けたりと活発な活動を行いました。

昭和二十六年（一九五一年）には、良夫の作品の『椎葉物語』がラジオドラマとして全国放送されるまでになったのです。この間も、小・中・高等学校の校歌を作詞したり、市立図書館や公民館の審議委員や看護学院で講師をするなど幅広く文化活動に専念していったのです。

昭和二十九年五十二才で没後、これまでに残した詩集や訳詩、文学、美術、音楽などの遺稿をまとめた詩とエッセイ集「黙示」が発刊され、さらに高い評価を受けたのでした。

都城市の図書館前に、次の詩碑があります。

おまえも旅人 わたしも旅人

さっさつと 何を急ごう

山肌をなで 山の根をさすり

わが胸の底の炎は 消されはせぬ

